

<事務局便り>

平成29年度炉物理部会運営委員

氏名	役職	所属
小原 徹	部会長 (任期1年)	東京工業大学
山本 章夫	副部会長 (任期1年)	名古屋大学
藤村 幸治	庶務幹事 (任期1年)	日立製作所
北田 孝典	部会等運営委員会担当運営委員	大阪大学
高木 直行	編集委員会担当運営委員	東京都市大学
奥村 啓介	HP担当幹事	原子力機構
小嶋 健介	HP担当幹事	原子力機構
多田 健一	HP担当幹事	原子力機構
郡司 智	財務小委員会担当幹事 (任期1年)	原子力機構
田淵 将人	財務小委員会担当幹事 (任期2年)	原子力エンジニアリング
相澤 直人	編集小委員会担当幹事 (任期1年)	東北大学
木村 礼	編集小委員会担当幹事 (任期2年)	東芝
北田 孝典	セミナー小委員会担当幹事 (任期1年)	大阪大学
竹田 敏	セミナー小委員会担当幹事 (任期1年)	大阪大学
千葉 豪	セミナー小委員会担当幹事 (任期2年)	北海道大学
岩元 大樹	学術交流小委員会担当幹事 (任期1年)	原子力機構
小野 道隆	学術交流小委員会担当幹事 (任期2年)	GNF-J
下 哲浩	学術交流小委員会担当幹事 (RPHA担当)	京都大学原子炉実験所
左近 敦士	学生・若手小委員会担当幹事 (任期1年)	近畿大学
竹本 友樹	学生・若手小委員会担当幹事 (任期2年)	三菱重工

(各役職の担当内容については、運営小委員会内規をご覧ください。)

### 編集小委員会からの御願い

部会報に対するご意見・ご要望などがございましたら、編集小委員会までお知らせ下さい。また、部会報の原稿として、「部会員の声（自由投稿欄）：内容不問で自由に投稿・意見を述べられる場」を常時募集しています。また、部会ニュース（ホームページに掲載）の原稿もございましたらお知らせください。

連絡先：編集小委員会（会報担当）

相澤 直人 naoto.aizawa[at]qse.tohoku.ac.jp

木村 礼 rei.kimura[at]toshiba.co.jp

[at]はアットマークと読み替えてください。

炉物理部会員の名簿は、日本原子力学会の名簿に基づいて作成しております。学会名簿は、部会報の郵送、部会メーリングリストの発信先 E メールアドレスなどに使用されます。勤務先、メールアドレス等に変更がある場合には、速やかに日本原子力学会に登録情報の変更手続きをして頂くようお願いいたします。

日本原子力学会炉物理部会第 47 回全体会議議事録

日時：平成 29 年 9 月 14 日(木)12:00-13:00

場所：日本原子力学会 2017 春の年会 G 会場  
(北海道大学工学部 C 棟 C213 教室)

(平成 29 年度上期分 審議および活動報告)

<部会賞表彰>

1. 平成 29 年度炉物理部会賞授与式

平成 29 年度炉物理部会賞の表彰が行われた。受賞は下記のとおり、

○奨励賞

「軽水炉における崩壊熱と核種生成量の評価精度に関する研究」

川本 洋右氏 (四国電力)

「積分型動特性モデルによる福島第一原子力発電所燃料デブリ体系の多領域超臨界動特性解析」

Delgersaikhan Tuya氏 (東京工業大学)

<審議事項>

2. 平成 29 年度予算と実績報告 (資料 47-1, 47-1/47-2 別紙)

財務小委員会担当幹事より配布資料 47-1、47-1/47-2 別紙に基づき、平成 29 年度の予算及び 8/30 時点迄の実績について報告がなされた。旅費交通費が予算 88 万円に対して、実績が 93 万円で 5 万円超過しているが、炉物理夏期セミナー残金 (約 18 万：暫定値) で吸収できる見通しとの説明があり、了承された。

3. 平成 30 年度予算案 (資料 47-2, 47-1/47-2 別紙)

財務小委員会担当幹事より配布資料 47-2、47-1/47-2 別紙に基づき、平成 30 年度の予算案について報告がなされた。主な支出が、旅費交通費 24 万円 (PHYSOR2018 の旅費補助) と日本で開催される RPHA2019 の開催準備のための拠出金 90 万円 (大半は後日回収可能) であるとの説明があった。PHYSOR2018 の学生旅費補助について、炉物理部会として送り出すので、部会等での会議報告や論文の謝辞への記載を検討すべきとのコメントがあった。また支出のうち、“その他” が最も金額が多いので、費目を“RPHA2019 の拠出金”等として明示した方がよいとのコメントがあった。それについては、学会の規定上それが可能かどうかの調査を含め、対応は部会長・運営小委員会に一任することで承認された。

4. 平成 30 年春の年会での企画セッションテーマについて (資料 47-3)

学術交流小委員会担当幹事 (JAEA・多田氏が代理で説明) より配布資料 47-3 に基づき、ノンテクニカルな企画案とテクニカルな企画案を交互に開催する案が説明された。前者は秋の大会、後者は春の年会が相応しいとの意見もあった。平成 30 年春の年会については、資料 47-3 の<テクニカルな企画案>以外にも企画案を再募集して、9 月中にテーマを決めることとした。

<報告および協議事項>

5. 第 49 回炉物理夏期セミナー、若手研究会開催結果報告 (資料 47-4)

セミナー小委員会担当幹事より配布資料 47-4 に基づき、セミナーのテーマ設定の理由や、参加者の大半が 35 歳以下の若手であったこと、講師も例年と比べ若手が多かったことが報告された。アンケートを実施したので、来年度以降の開催に反映して欲しいと述べられた。

6. RPHA2017 開催報告 (資料 47-3, 5)

学術交流小委員会担当幹事 (RPHA 担当) から資料 47-3 を使って、また部会長から資料 47-5 を使って、第 2 回日中韓炉物理 WS (RPHA2017) の開催状況について報告がなされた。日本の参加者が少なかったが、プレナリートクでは、小原部会長が動特性解析手法に関する講演を行い、何とか体面を保てたことが説明された。

次回の RPHA2019 は日本 (大阪) での開催となる。

7. 第 9 回日韓四部会合同サマースクール開催報告 (資料 47-3)

学術交流小委員会担当幹事 (JAEA・多田健一氏が代理で報告) から資料 47-3 を使って、第 9 回日韓四部会合同サマースクール開催の開催報告が行われた。炉物理部会からは福井大学・W. F. G. Van Rooijen 氏が基礎的な炉物理計算を踏まえた核変換と中性子経済についての講義をされたとの事。

8. その他 第 5 回炉物理専門研究会の開催案内 (資料 47-5) 等

京大炉・卞氏から資料 47-5 を使って、第 5 回「炉物理専門研究会」(2017 年 11/29, 30、京大炉開催) の開催案内がなされた。

岡嶋副会長・理事から若手連絡会 (YGN) の加入率が低いので、該当の若手 (4/1 時点で 39 歳以下) は加入して欲しいとの要請があった。会費無料で学会 HP から加入できるとの事。

佐治氏から、ANS の TPC 等の活動や Special session の情報を全体会議等で共有する機会を設けてはとの提案があり、次回の全体会議の議題や企画セッションのテーマの候補として運営小委員会で検討することとなった。

<その他>

① 部会賞について

部会長から、貢献賞の表彰範囲をひろげるため、表彰対象をこれまでの個人に加えてグループや施設を加えてはどうかとの提案があった。異論はなかったため、部会賞表彰細則の改訂案を運営小委員会で検討して、次回の全体会議に諮ることとなった。

② 日韓四部会サマースクール、日中韓炉物理WS (RPHA) について

部会長の提案により、日韓四部会サマースクール、日中韓炉物理WS (RPHA) について、今後の取組みや開催・参加の意義について議論が行われた。

日韓四部会サマースクールについては、内容が加速器・核融合などの基礎的なもので、予算面でも負担が大きい、他部会との関係については1F事故を経験した現状では安全部会との連携が重要、等の意見が出た。その結果、炉物理部会としては今後の参加を見合わせる方向で必要な調整を行うこととなった。他部会及び韓国側の了解が必要であるため、部会長・運営小委員会で対応を検討することとなった。

日中韓炉物理WS (RPHA) については、学生や若手のスキルアップの良い機会である等の意見があり、内容がより充実されるよう工夫を行った上で、次回の日本開催以降も参加を継続することとなった。継続にあたってはJAEAや民間企業でも参加しやすいよう工夫すべき、等の意見が出た。

配布資料

資料 47-1 平成 29 年度予算について

資料 47-2 平成 30 年度予算案について

資料 47-1,2 別紙

資料 47-3 平成 30 年春の年会での企画セッションについて

資料 47-4 第 49 回炉物理夏期セミナー、若手研究会開催報告

資料 47-3,5 RPHA(Reactor Physics Asia) 2017 開催報告

資料 47-3 第 9 回日韓四部会合同サマースクール開催報告

資料 47-6 第 5 回炉物理専門研究会の開催案内

以上

## 編集後記

炉物理部会報の発行に際し、まず初めにご多忙にも関わらず、記事の執筆にご協力いただいた皆様へ深く御礼申し上げます。また、2015年度および2016年度の部会報につきまして、発行を定期的に行うことが出来ず、炉物理部会会員の皆様に多大なご迷惑をお掛けすることとなりました。この場を持ちまして、深くお詫び申し上げます。

2017年度の出来事として、特集記事にて取り上げたように、近大炉 (UTR-KINKI) および京大炉 (KUCA, KUR) が安全審査に合格し、実験炉の運転が再開されるという、炉物理分野にとって大変喜ばしい出来事がありました。しかしながら、巻頭言にて小原先生が書かれたように、炉物理が今後も重要が工学・学術分野として存在し続けるためには、炉物理の存在意義を社会に対して認めてもらう必要があるかと思えます。また、橋本先生が述べられたように、実験炉の運転再開が行われたこのタイミングは、実験炉利用の立ち位置、原子炉実験教育・研究を再考する良い契機ではないかと思えます。

折しも、2017年10月に炉物理ロードマップ2017が公開され、私も編集小委員会担当幹事の任期である2016年からの2年間のうちに、炉物理ロードマップ検討WGメンバーとして、炉物理ロードマップ2017の作成に携わる機会がありました。炉物理ロードマップでは、初めに炉物理分野の「あるべき姿」および炉物理のVisionとMissionに関する議論が行われ、それらを達成するために様々な基盤で取るべきアクションは何か、の検討が行われました。私は主に人材基盤分野の策定に携わりましたが、炉物理教育だけでなく炉物理全体のあり方を考える良い機会をいただいたと感じております。炉物理の錚々たるメンバー（不肖相澤を除く）が集まり、炉物理の現状をどう捉え、将来をどう考えているのかをまとめた大作となっておりますので、未読の方は、是非ご一読いただきたく存じます。

これらの観点から、2017年を振り返ると、2017年は今後の炉物理分野にとって新たなターニングポイントとなる1年だったのではないかと、思えます。

私の編集小委員会担当幹事としての任期は2017年度を持ちまして満了となりますが、今後の炉物理の更なる一步に微力ながら貢献できるよう、精進したいと思います。

また、来年度以降につきまして、部会報を毎年定期的に発行するために、次期担当幹事へ情報の伝達を行っていききたいと思います。ありがとうございました。

編集小委員会担当幹事  
東北大学 相澤直人